

惜別の辞

獅山さん

彼と初めて会ったのがいつだったのか、正確には思い出せない。おそらく 1990 年代だったと思う。何年か経った後に、経産省に行く途中だったか何故か都内を二人で歩いていて、京都の学生時代の話題になり、学部は違うものの学生時代にひよっとしたら接点があったかもしれない、私と同時期にどんな学生生活を送ったのか何となく想像できた。また、私の娘たちが彼の出身高校の後輩だったことや彼の家族の話などもして、それ以来、親しみを感じるようになっていったのだと思う。

仕事ぶりは皆さんご存じのとおり、まさにぐいぐいとねじ込んでくる感じで、日本でより海外で顔を合わすことがはるかに多かった。中東に限らず、ヨーロッパ、米国での展示会、イベントでも頻繁に言葉を交わしていた。展示会に出展している際は、あたかも自社のブースのように、ぐいぐいと乗り込んでくるので、目を光らせておかないとややこしいことになる。まあ、お互いさまではあるけど。

海外でお客さんを訪問すると、獅山さんが来てこんなこと言ってたよという話を良く聞かされた。勿論、私たちへの悪口である。こちらも、それは違うよとお客さんに情報の上書きをする。獅山さんが私のことをどう思っていたかは知る術もないが、私は獅山さんを良きライバルだと思っていたし、彼の“ぐいぐい”にはある意味尊敬していた。競争無くして、進歩は無い。競争していたことが、海水淡水化の進歩に繋がっていたとしたら幸いなことだ。

獅山さんから、食事しながら水処理業界の未来について語り合おうとお誘いを受けていたがスケジュールがなかなか合わず、そうこうしているうちにコンプライアンスが厳しくなり二人で会うのはまずかろうと立ち消えになった。

お互い引退したら、じっくりと話をしようと思っていたのに残念でならない。

ここまで書いてきて、私の携帯電話に獅山さんの連絡先が残されていることをふと思い出した。そのままにしておこう。

藤原信也氏(東洋紡執行役員、JDA 協会前副理事長)